胃結核ニ就テ

新渴醫科大學病理學教室(指導川村教授)

助 寿 楠 本 正 康

目 次

第一章 緒 言

第二章 文獻概要

第三章 實驗材料及ピ研究方法

第四章 實驗例

第五章 實驗例ノ總括

第六章 考 按

第一節 胃結核ノ統計的觀察ニ就テ

第二節 胃結核ト他臟器結核ノ關係ニ就テ

第三節 胃結核ノ種類ニ就テ

第四節 病理解剖學的形態學的觀察ニ就テ

第五節 胃結核ノ稀有ナル理由ニ就テ

第六節 胃結核ノ感染機轉ニ就テ

第七章 結 論

文 獻

第一章 緒 言

肺結核ニ於テハ屢、腸結核 / 併發 ヲ 見ルニ反シ 胃結核ハ甚ダ稀デ而モ其 / 多 クハ解剖ニ依リ初 メテ 發見セラル、モノナルコトハ吾人 / 日常齊 シク經驗スル所ナリ。サレド本病ニ關スル文獻 ハ決シテ之ニ乏シカラズ。1824年 Barkhausen 氏が初メテ之ヲ報告シテョリ Litten, Orth, Prezewoski, Barbacci, Wilms 氏等其 / 他 / 學者ニ依リ漸次報告セラレタリ。本邦ニ於テハ 1887年肥田氏 / 報告ヲ 以テ 嚆矢トシ金森、桂 田、齋藤、木積、三田、和田、大槻、中山、小 出、武藤、奥田、加藤、山極、古村、川合、木 ト、矢吹、小塚、常久、槇、堀地ノ諸氏ノ記載有リテ其ノ實験例 50 有餘例ニ達セリ。 而モ從來是等ノ症例ノ多クハ剖檢ノ際偶然發見セラレタルモノナルモ、近時本症が胃手術的ニ奏效セル例漸次報告セラル、ニ及ビ本症ハ啻ニ病理解剖上ノミナラズ臨牀上ニモ頗ル有意義ナル疾患トナレリ。然ルニ上述ノ本邦ニ於ケル記載ハ多クハー例報告ノ域ヲ脱セザルウラミ無キニ非ズ。 依ツテ余ハ當教室ニ 於ケル剖檢例 1910 體ヲ檢シ胃結核 8 例ヲ得之ニ依リテ胃結核ノ綜括的研究ヲナシタリ。

第二章 文獻概要

胃結核ハ Rokitansky, Ziegler, Kaufmann, Aschoff 氏等 / 多クノ教科書ニハ何レモ其ノ稀有ナルヲ記載シアレリ。胃結核ノ頻度ニ關スル統計ヲ見ルニ結核屍數ニ對スル百分率トシテ最低キヲ示セルハ Simmonds 氏 / 0.4%、最高キヲ示セルハ桂田氏 / 18.7% ナリ。Glaubitt 氏ニ依レバ全屍數 12528 例中結核屍 2337 例、胃結核 47 例ニシテ胃結核ハ全屍數 / 0.4%、結核屍 / 2.4% Gossmann 氏ニ依レバ全屍數 5900 例中結核屍 2360 例、胃結核 28 例ニシテ全屍數 /

0.4%、結核屍!1.1%ナリ。 又堀地氏ハ全屍 數ニ對シ1.3%、結核屍ニ 對シ3.26% ヲ 報告 セリ。

胃結核 / 性及ビ年齢ニ依ル關係ニ就 + Broders 氏ハ男 89 例、女 48 例ニシテ約 2:1 ナリト言ヒ Gossmann 氏ハ 2.6:1 ヲ Arloing 氏ハ3:1 ヲ數へ、コレニ反シ Glaubitt 氏ハ女性ニ屢ミ 來ルモノナリト言へリ。 Wilms 氏ハ生後 9 ケ 月ノ小兒ニ、河合氏ハ1年6 ケ月ノ女兒ニ胃結 核ヲ見、常久氏ハ66 歳ノ老人ニ Prezewoski 氏ハ80歳ノ老人ニ之ヲ見タリ。Arloing 氏ハ 平均年齢トシテ41歳ヲ報告セリ。

胃結核ノ種類ニツキ、Koejetzny 氏ハ粟粒結核、大結節樣結核、結核性潰瘍、腫瘍形成(所謂增殖性)結核ヲ區別シ、Severin 氏ハ粟粒結核、潰瘍性結核、增殖性腫瘤性結核、炎症性硬化性結核ヲ分チ Nöllenberg 氏ハ結核性胃潰瘍ト肥厚性胃結核ヲ區別シ Bātzner 氏ハ潰瘍型ト腫瘍型ヲ分類シ Spengler 氏ハ潰瘍型ト肥大性硬變性型ヲ分チ、Albu 氏ハ結核性潰瘍結核性胃炎瀰蔓性肥大性結核ヲ擧ゲ Pfanner 氏ハ結核性胃潰瘍ヲ更ニ單純性潰瘍ト慢性硬化性潰瘍トノ二種ニ區別セリ。

以上!諸型!中潰瘍型胃結核ガ其!大多數ラ占。 ムルモノトシテ一般ニ認メラレ Broders 氏ニ 依レバ176 例中135 例ハ潰瘍型ニシテ正ニ其! 81 %ニ相當スト云へり。

潰瘍型ニ就キ其ノ好發部位ハ Broders 氏ハ幽 門ニシテ之ニ次イデ小彎ナリト云ヒ Gossmann 氏ハ小轡ヲ以テ Katarina-Keller 氏ハ大彎ヲ以 テ其ノ好發部位ナリト 述べ Hübschmann 氏 ハ幽門ニ屢く見ラル、モノナリト云へり。潰瘍 敷ハ Broders 氏、Gossmann 氏ハ單發ョリモ 多發ハ稍 l 多シト 云ヒコレニ 反シ Katarina-Keller 氏ハ單發ヲ以テ多シトナシ Arloing 氏 ハ文獻ヲ綜合シテ單發スル場合多シト說ケリ。 潰瘍ノ大キサハ粟粒大ノ物ヨリ Hubschmann, Bätzner 兩氏ノ手掌大ニ至ルマデ種々ノ報告ア リ、ソノ性狀ニ關シ Simmonds 氏ハ腸結核ノ 場合ト全ク同一ナル チ述べ、Rokitansky 氏 ハ胃結核ハ腸結核ノ 一部分的現象ナ リ ト 云ヒ Hübschmann 氏ハ本質的ニハ全ク腸結核ト同 **檬ナルモ、外形ノ一層多種多様ニシテ不規則ナ** ルヲ主張セリ。Barbacci 氏、小塚氏ハ幽門ノ全 周ヲ繧リ 輪狀ニ 取園 ミタル 潰瘍例ヲ見タリ。 Gossmann 氏ハ潰瘍ハ腸ノ夫レト異リ胃ノ縦徑 ニ從フモノナリトナシ Prezewoski 氏ハ之ヲ淋 巴管及ビ血管ノ走行ノ關係ニ歸セシメタリ。

組織的所見ニ就+ Prezewoski 氏ハ一般ニ結核

性變化ハ粘膜下組織ニ在リテ腸ノ夫レョリモ粘膜下組織ノ侵サル、コト强ク粘膜ノ被害ハ比較的輕度ナリト云へリ。Katarina-Keller 氏ハ胃結核ニ於テハ此ノ粘膜下組織ノ圓形細胞浸潤ハ一般ニ著明ナルガ普通ナリト云に之ヲ其ノ組織的構造ニ歸シ Simmonds 氏ハ細胞浸潤ハ特ニ邊縁ニ於テ著明ナリト云に Dewey 氏ハ胃壁ニ 廣汎ナル結核性淋巴管炎ヲ 起セ ル 例ヲ 記載シ Gossmann 氏ハ潰瘍附近ノ小動脈ノ內膜肥厚及 ビ外膜ノ細胞浸潤アリテ黴毒性變化ニ似タル所見ヲ呈スル事アルヲ報告セリ。

增殖性(腫瘤性)胃結核=就キ Hübschmann 氏ハ稀ニ遭遇スルモノナリト云ヒ Konjetzny 氏ハ本症ハモトシテ幽門部粘膜下組織ニ發生シテ胃壁ノ肥厚ヲ來シ爲ニ幽門狹窄ヲ呈スルモノナリト述べ Nöllenbeng 氏ハ固有筋層モ亦共ニ强ク侵サル、モノナリト云ヒ Severin 氏ハ「ボリープ」狀増殖ヲ呈セル例ヲ報告シ Albu 氏ハロットを問こ硬キ 瀰蔓性浸潤ア ル例ヲ見タリ。Pfanner 氏ハ 潰瘍型胃結核ハ 普通重症結核患者ニ現ハル、ニ反シ本型ハ極メテ軽症ノ結核患者、時ニハ全ク他ニ結核竈ヲ殺見シ得ザル如キモノニ見ラルト云へ リ。 Katarina-Keller 氏ハ本型ハ屢、無腫ト誤ラル、モノナリト 云ヒ Konjetzny 氏ハ臨床上極メテ意味アルモノトシテ特ニ之ヲ外科的胃結核ト稱セリ。

胃ノ栗粒結核ニ就キ Kaufmann 氏、Simmonds 氏、Wilms 氏等ハソノ稀有ナラザルラ說キ Hübschmann 氏ハ其ノ稀有ナルヲ主張セリ。 Katarina-Keller 氏ハ多クノ硬キ一部破壞サレ タル結節ヲ經驗シ其ノ中ノアル物ハ完全ニ乾酪 化セルヲ見、Schlesinger 氏ハ膿ヲ以テ充サレ 瘻ニ依リテ胃腔及ビ十二指腸腔ト交通セル膿瘍 ヲ粘膜下組織ニ見タリ。

胃結核籤ニ出現スルラングハンス氏巨態細胞ニ就キ桂田氏ハ特ニ其ノ甚ダ少数ナルコトニ注意シ大槻氏ハ之ニ反シ其ノ多数ニ存在スルコトラ述べり。結核菌ヲ組織的ニ初メテ之ヲ證明セルハ Coats 氏(1886)ナレド Barbacci 氏 Preze-

woski 氏、Gossmann 氏等何レモ其ノ甚ダ困難 ナルヲ述べ之ニ反シ桂田氏ハ多數ニ乙ヲ證明シ 得ルモノトナセリ。

胃結核が同ジ消化管デアリ乍ラ腸結核ニ比シテ 極メテ少數ナル理由ニ就キ Ziegler 氏、Holzmann 氏等ハ胃液ノ酸性ナルコト即チ結核菌ニ對 スル胃液ノ殺菌力ヲ以テ之ヲ說明シSimmonds 氏ハ胃液ノ酸度正常ナル時ハ結核菌ハ生活力ラ 減殺シ得ルモ一度ビ胃機能障碍ヲ來シ胃液分泌 ニ異狀ヲ呈スル時ハ結核菌ノ増殖ニ好條件ヲ與 フルモノナリト云へり。

Ghon 氏及ビ Kudlich 氏ハ淋巴濾胞ノ散在狀 態ニ由ルモノ、卽チ腸管ニハ淋巴濾胞ノ多數散 在シ居ルニ反シ胃壁ニハ甚ダ其ノ僅少ナルニ由 ルモノトセリ。 Prezewoski 氏ハ自己ノ 5 例ニ 於テ多數ノ淋巴小結節ヲ見、Barbacci 氏ハ多 クノ濾胞ノ肥大セルヲ見共ニ淋巴濾胞ノ少數ナ ル事實ヲ以テ胃結核ノ稀有ナル理由トナセリ。 Katarina-Keller ハ胃運動ニ依リ內容物ガ速ニ 腸管内ニ排泄移行セラレ加之胃内面が粘液ヲ以 テ被覆サレ居ル爲ニ結核菌ガ胃粘膜ニ附著シ難 +爲ナリト云ヒ Brieger 氏ハ重症結核患者ノ 大多數ニ於テ胃運動機能ノ全ク正常ナルヲ見テ 胃運動ヲ以テ 胃結核ノ 稀ナ ル 理由トナセリ。 Konjetzny 氏ハ肺結核ノ場合ニ喀痰ト共ニ胃 内ニ達スル結核菌ハ多量ノ粘液性物質ニ依リテ 被覆サレ居ルニ對シ胃中ノ「ペプシン」ガ之ニ作 用スルコト少キガ爲ニ結核菌ハ殆ンド直接胃粘 膜ニ接スルコトナク腸管ニ送ラル、爲ナリト云 へり。

胃結核ノ感染經路ニ就キテハ一般ニ胃内腔ヨリ ノ直接傳染、血行ニ依ル感染、淋巴道ニ依ルモ ノ及ビ周圍ヨリ直接性ニ侵襲スルモノ、四經路 ガ認メラレ居レリ。 Hübschmann 氏、山極氏 等ハ喀痰ハ唾液ト共ニ結核菌ヲ嚥下スルコトニ 依リコ、二胃内腔ヨリノ直接傳染ヲ來スコト最

普誦ナリトシ Kaufmann 氏ハ全身粟粒結核ノ 場合ニ血行ニ依り其ノ一部分現象トシテ胃結核 ヲ生ズル事最多シトナシ、桂田氏ハ自己 / 9例 ヲ悉ク血行ニ依ル傳染ナリト主張セリ。淋巴道 ニ依ル感染ヲ最强ク主張セルハ Dewey 氏ニシ テ、氏ハ自己ノ實驗例ノミナラズ、他ノ多クノ 胃結核モ亦淋巴行ニ依ル傳染ヲ考フルベキモノ ナリト云へり。胃壁周圍ヨリ直達的ニ侵襲シ來 レルモノトシテ Gosmann 氏ハ乾酪化セル淋巴 腺ト胃が癒著セル例ヲ見、Struppler 氏ハ腹膜 ノ結**核性變化ガ接續的**ニ胃ヲ侵セル**例**ヲ報告セ

胃結核ノ發生ヲ促シ得ベキ條件トシテ胃粘膜ノ 損傷ガ重要視サル。即チ Orth 氏ハ胃粘膜ヲ傷 害スベキ石灰片ヲ含メル結節ヲ家兎ニ與ヘル事 ニ依リテ胃結核ヲ發生セシムルコトニ成功シ中 山氏ハ圓形潰瘍ガ二次的ニ結核感染セリト認メ ラル、症例ヲ報告シ、 Hamperl 氏及ビ常久氏 ハ癌腫ニ依ル壌死面ニ結核菌侵入シテコ、ニ結 核性變化ヲ續發セル例ヲ經驗シ胃粘膜損傷ヲ以 テ胃結核發生 / 大切 ナ ル 一條件ト考へタリ。 Hübschmann 氏ハ結核患者ノ胃粘膜糜爛ヲ鏡 檢スルニ屢 、 結核性變化ヲ呈セルヲ見テ胃粘膜 糜爛面ニ結核菌が附著シコ、ニ結核性變化ヲ起 スモノト考へタリ。更ニ堀地氏ハ胃結核ト淋巴 體質トノ間ニハアル關係アルモノ、如シト云へ リ。 Hübschmann 氏ニ依レバ胃結核ノ發生ハ 殆ンド總テ他臟器ニ結核アリテ之ニ續發的ニ發 生スルモノニシテ確實ニ原發セリト見ラル、例 ハ未ダ之ヲ見ズト云へり。(1928年) 1909年ニ Holzmann 氏ハ文獻ニ依り純原發性ト認メ得 ベキハ當時僅ニ6例ニ過ギズト云へり。サレド 胃結核ノ原發セリトシテ報告セラレタル例ハ相 當多ク本邦ニ於テモ桂田、齋藤、小塚ノ三氏ガ 各自己ノ1例ヲ以テ原發セルモノナリト主張シ 居 レリ。

第三章 研究材料及ビ研究方法

研究材料トシテハ當教室剖檢例中病理解剖的ニ | 結核症ノ診斷ヲ附セラレタル物ニシテ「フォルマ

リン」液固定又ハ<u>カイゼルリング</u>氏液固定ニ依 リ保存セラレタル 617 例ノ胃ヲ用ヒタリ。研究 方法トシテハ以上ノ材料中胃ニ內眼的ニ潰瘍、 結節又ハ糜爛ト思ハル、モノアルヲ組織片ニ取 リ「パラフィン」包埋ヲ 施 シタル後5 μ ノ切片ヲ 作り染色トシテハ「ヘマトキシリン―エオジン」 重染色、「ヘマトキシリン―ワンギーソン」重染 色及ビ<u>チールネルゼン</u>氏結核菌染色法ヲ應用セ リ。

第四章 實驗例

第1例 ■ 某 21歳 男

- 1. 臨牀的診斷 肺結核及ど腸結核 生前特ニ胃症狀ヲ訴ヘズ、屍體ハ死後 15 時間ニシテ 剖檢ニ附セリ。
- 2. 病理解剖的診斷(解剖番號 86)
 - 1. 癒著性結核性腹膜炎
 - 2. 兩側癒著性結核性肋膜炎
 - 3. 肺臓、腎臓、肝臓及ど脾臓ノ粟粒結核
 - 4. 乾酪性結核性淋巴腺炎(腹膜後部、腸間膜、縦瞬管)
 - 5. 胃及ど食道ノ結核性潰瘍
 - 6. 陽結核
 - 7. 右肺膨脹不全
 - 8. 疣贅性心內膜炎
 - 9. 足部ノ皮膚浮腫
 - 10. 腸管ノ假性「メラノーゼ」
- 3. 胃ノ病理解剖的所見

胃ハ中等量ノ稀薄液狀内容物ヲ以テ充盈ス。 噴門部ノ前壁ニハ 邊緣鋸齒狀不正ナル五十錢銀貨大黄白色ノ潰瘍ヲ見ル。潰瘍緣ニハ小結節ヲ有シ其ノ緣下ハ炒入セリ。潰瘍底部ハ部分ニ 依リ深ク漿膜ニ 達スル所又ハ橋狀ヲナシ消息子ヲ送入シ得ル所アリ。漿膜面ニ於テハ其ノ潰瘍ノ部ニ相當シテ漿膜が 灰白色ニ 肥厚シ其ノ周圍ニ粟粒大ヨリ 蠶豆大ニ 至ル 結節及ビ乾酪化セル淋巴腺ノ集積ヲ見ル。

4. 組織的所見

遺瘍底部ノ最モ深キ所ハ筋膜ヲ現シ其ノ他ノ部分ニ 於テモ粘膜下層ノ大部分ハ崩壊脱落セラル。潰瘍底ニ ハ同質性顆粒様ニ染色サレタル 薄層ヲ有シ之ニ次イ ご類上皮細胞及ピ淋巴細胞ヨリナル 肉芽組織アリ。 潰瘍底ノ切入セル部分モ 亦他底部ト同質ノ 物ニテ 覆 ハレ、ソノ上部ノ粘膜ニハ所々ニ粟粒大ノ類上皮細胞 ヨリ成ル結節アレドモ 特別ニ 腫脹増厚ヲ 見ズ。一般 ニ潰瘍底面ハ粘膜下層ニ 相當シテ 類上皮細胞及ピ 淋 巴球ノ浸潤强の増加セル小血管ハ 充盈ス。 更ニ細胞浸潤ハ結節狀又ハ東狀ヲナシテ深部ニ進ミ 居ル部アリ。ソノ中央部ハ乾酪性變化ヲ示シ居レリ。筋層ノ配列ハ不規則トナリ 更ニ筋東ノ 破壞セラレタル所モ見ラレ筋間結締織ハ増殖ヲ呈ス。 漿膜ハ 潰瘍底ニ 相當シテ著シク 結締織ノ増殖ヲ見其ノ中ニ多數ノ結節ヲ有ス。該結節ハ類上皮細胞ョリナルアリ。又ハ乾酪化セルアリ。更ニラングハンス氏巨態細胞ノ認メラル、モノアリ。 漿膜淋巴腺ニハ殆ン ド 乾酪化セルモノアルモ、粘膜下層ノ乾酪化セル部トノ交通ハ認メズ。結核菌染色法ニョリ 潰瘍面ノ結節及ビ浸潤部ニ可ナリ多數ノ結核菌ヲ證明セリ。

第2例 某 19歲 男

1. 臨床的診斷 左側肺結核、結核性肋膜炎、結核性 腹膜炎

生前胃症狀ヲ特ニ訴ヘズ、屍體ハ當教室ニ於テ死後 21 時間デ剖檢ニ附セリ。

- 2. 病理解剖的診斷(解剖番號 1017)
 - 1. 兩側肺結核(空洞形成)
 - 2. 兩側胸腔ノ繊維性完全閉塞
 - 3. 結核性渗出性腹膜炎
 - 4. 兩側口蓋扁桃腺及じ舌根部ノ結核性潰瘍
 - 5. 喉頭氣管並ニ氣管枝ノ結核性潰瘍
 - 6. 胃ノ結核性潰瘍
 - 7. 小腸及ビ大腸ノ結核性潰瘍
 - 8. 脾臟及ビ肝臟ノ粟粒結核
 - 9. 肺門部氣管周圍及ビ氣管分岐部淋巴腺結核
 - 10. 腺 疳
 - 11. 心臓右室ノ輕度ノ擴張
 - 12. 脂肪肝
 - 13. 副腎皮質 / 脂肪減少
 - 14. 貧血諸臟器
- 3. 胃ノ病理解剖的所見

胃ハ縮小シ内容トシテ少量ノ 淡灰黄色ノ粘液性物質

ヲ有ス。粘液分泌亢進シ粘膜一般ニ 貧血性ナルモ胃體部ニハ中等度ノ血液浸潤ヲ認ム。潰瘍ハ大ナルモノ(1cm×1.5cm)1個ト小ナルモノ(粟粒大乃至米粒大)3個ト合セテ4個アリ大ナルモノハ胃ノ前壁ニ於テ小彎ニ近ク幽門輪ョリ5cmノ所ニ小ナルモノハ小彎ニ於テ噴門ニ近クソノ上端ョリ4cmノ所ニアリ。大ナル潰瘍ハ稍、陳舊性ニシテ丸味ヲ帶ビ、不正五角形ニ近キ卵圓形ヲ呈シ縁下ノ輕度ノ 鬱入邊緣不正、鋸齒狀ヲ堤隆ヲ認ムル外肉眼的ニ明ナル結核性特徵ヲ示サズ。小ナル3個ノ潰瘍ハ何レモ新シク邊緣不正、鋸齒狀ヲ星シ著明ニ繰下彎入シ底面ニ乾酪性物質ヲ有ス。兩者共ニ肉眼的ニ結核結節ヲ認メ得ズ。 漿膜面ニハ變化ナク叉腫脹セル淋巴腺ノ附者ヲ見ズ。

4. 組織的所見

遺瘍底へ何レモ粘膜下層ニ在リ且ツ粘膜筋層直下ニ 殆ヒテ周圍ニ擴張ノ微明ナリ。大ナル潰瘍ノ底面 ハ極メテ不規則消化性ニシテ 明カナル 結核性變化ヲ呈セズ。周圍部ニハ類上皮細胞ト共ニ主トシテコレヲ 圍 終スル著明ナル圓形細胞浸潤ヲ 伴フ 結核性變化ヲ 呈 シ其ノ一部ニ乾酪變性ヲ認ム。ラングハンス巨態細胞ハ大ナル潰瘍ノ固有筋層ノ直下ニ於テ 遠隔シタル 結節ニ唯1個認メ得タルノミニシテ他ノ何レノ 潰瘍部ニ唯1個認メ得タルノミニシテ他ノ何レノ 潰瘍部ニモコレヲ證明セズ。小ナル潰瘍ハ各小血管ノ内膜ノ肥厚閉塞及ビ血管周圍ノ細胞浸潤者明ナルモノヲ包擁セル血行性ニ 發生セリト 思考セラル、2個ノ小結節ノ相癒合シテ崩壊セル像ヲ呈ス。

結核菌ハ何レモ組織的ニ 潰瘍底及ビ 縁下部ニ證明シ 得タり。

第 3 例 ■ 某 21 歳 男

1. 臨床的診斷 肺結核、粟粒結核

生前特別ナル胃症狀ヲ呈サブ。屍體ハ死後 9 時間ニシ テ當教室ニ於テ剖檢ニ付セリ。

- 2. 病理解剖的診斷
 - 1. 左側渗出性破壞性肺結核
 - 2. 右側肺臓ノ多發性結節形成
 - 3. 兩側胸腔ノ完全閉塞
 - 4. 心臓右室ノ輕度ノ擴張
 - 5. 肉荳蒄肝
 - 6. 胃ノ結核性潰瘍
 - 7. 腸結核
 - 8. 肝臓「ヂストマ」
 - 9. 兩側腎臓ノ鬱血及ビ囊腫形成

10. 脾 腫

3. 胃ノ病理解剖的所見

胃ハ内容トシテ少量ノ暗褐色ノ粘液性物質アリ。粘膜面ニハ自家消化ノ像ナキモ一部充血性ニシテ 一般ニ粘液模物質ニヨリ被覆サル。 幽門輪ハ 僅ニ小指ヲ通ズルノミ。幽門輪ノ近クニ五個ノ 淺キ 豌豆大ノ 潰瘍アリ、ソノ邊縁ハ何レモ正ニシテ彎入堤隆ヲ見ズ。潰瘍底ハ多少充血性ナルモ出血ノ像ナク平滑清淨ナリ。小彎ニ沿ヒテ幽門輪カラ 6cm ノ所ニ 3cm×2cm ノ邊繰ノ不正ニシテ鋭利ナル 潰瘍1個及ビ豌豆大邊縁正ナル4個ノ潰瘍アリ。潰瘍底 ハ何レモ血液模物質ニョリテ暗黑色ニ色ドラレ平滑ニシテ乾酪性物質結節又ハ小血管斷端等ヲ證明セズ。邊緣ハ大ナル潰瘍ニ於テハ多少褐色ヲ呈シ著明ナル彎入及ビ堤隆ヲ見ル。漿膜面ヲ見ルモ何等特記スベキ變化ナシ。

4. 組織的所見

遺瘍底ハ粘膜下層ニ在リ 其面ハ不規則多少顆粒狀 ヲ呈シ固有ノ 結核性變化ハ 明カナラザルモ一般ニ 慢性ノ潰瘍ナルノ像著明ナリ、且ツ核ノ形狀鍛利ナラズ シテ多少壞死ヲ思ハシムル狀ヲ示ス。邊緣ニ近キ部ハ 孁 ロ 圓形細胞浸潤著明ニシテ明ニ周園ニ 向 ヒ 擴大ノ 改 遺瘍底ヨリ少シク離レ 粘膜層ニハ 變化ヲ見ズ。 遺瘍底ヨリ少シク離レ 粘膜下層ニ 於テ一部圓形細胞 ノ浸潤强ク所々ニ 類上皮細胞ノ 集積アリ。 サレドド テハ細胞浸潤 小変ヲ見ズ 結締織ノ 増殖ハ又コレヲ證シ 得ズ、巨態細胞結節等ハ何レノ部ニモ 之ヲ證シ得ズ。 血管ハ一般ニ充血性ナルモ 特ニ 血塞性變化ヲ 見ズ。 結核菌ハ途ニコレヲ證明セザリキ

第4例 某 46歲 男

1. 臨床的診斷 兩側肺結核

生前特ニ胃症狀ヲ訴ヘズ。屍體ハ當教室ニ於テ死後 16 時間ニシテ剖檢セリ

- 2. 病理解剖的診斷(解剖番號 1295)
 - 1. 兩側滲出性肺結核
 - 2. 右肺ノ乾酪性肺炎
 - 3. 左側胸腔ノ繊維性完全閉塞
 - 4. 心右室ノ輕度ノ擴張
 - 5. 肝臓ノ萎縮及ビ鬱血
 - 6. 鬱血腎
 - 7. 胃ノ多發性結核性潰瘍
 - 8. 腎臓ノ粟粒結核

9. 腎臓ノ多發性囊腫及ビ瘢痕

10. 心臟腱斑

3. 胃ノ病理解剖的所見

4. 組織的所見

潰瘍底ハ粘膜下層ニ在リ、一般ニ淺キ潰瘍ニシテー部粘膜筋層ヲ殘シタル所サヘアリ。底面ハ不規則顆粒狀ヲ呈シ底部ニ於テハ全體ニ類上皮細胞及ど淋巴球ノ浸潤强ク殊ニ淋巴球ハ深ク固有筋層ニマデ侵入シ居ルヲ見ル。邊緣ニ於テハ粘膜筋層直下ニ於テ淋巴球ノ浸潤著明ナリ。

巨態細胞、結節、乾酪性變化等固有ノ結核性變化ハ何 レノ部ニモコレヲ 證シ得ズ。 潰瘍邊縁附近ノ 粘膜層 ハ多少濾胞装置ノ擴大ヲ呈シ 小血管ハ 一般ニ擴張充 血ノ像ヲ示スモ血塞性變化ヲ認メ得ズ。

結核菌の組織的ニ潰瘍底部ニ 於テ 粘膜下層中ニ少數 コレヲ證明シ得タリ。

第5例 某 53歲 男

- 1. 臨牀的診斷 肺、肋膜、腸及ビ淋巴腺ノ結核症 生前何等胃症狀ヲ呈サブ。死體ハ當教室 = 於テ死後 8時間ニテ剖檢ニ付セリ。
- 2. 病理解剖的診斷(解剖番號 1398)
 - 1. 兩側硬變性肺結核
 - 2. 兩側胸腔/完全閉塞
 - 3. 小腸ノ結核性潰瘍
 - 4. 胃粘膜 / 結節及ビ瘢痕
 - 5. 心臓及ど肝臓ノ褐色萎縮
 - 6. 萎縮腎

7. 蟲樣突起ノ瘢痕癒著

3. 胃ノ病理解剖的所見

胃ハ内容トシテ僅ノ液狀ノ物質アリ。胃粘膜ハ粘液樣物質ニョリ被覆サル。小劈ノ中央ニ於テ 噴門輪ョリ12cm 難レ蠶豆大ノ多少充血ヲ呈セル 療痕狀陷凹ヲ示セル所アリ。該療痕ノ 中央部ニ於テ 粘膜下層ニ相當シ2個ノ黄白色平米粒大ノ 乾酪化セル小結節ヲ見ル。 糜爛、潰瘍ハナク漿膜面ノ結節ニ相當セル部ヲ見ルモ 變化ナクソノ他淋巴腺ノ腫脹肥大等ヲ認メズ。

4. 組織的所見

結節ハ粘膜下層ノ上部ニ在リ 結節ヲ覆フ粘膜面ニハ 變化ヲ見ザルモソノ部ニ於テ明ニ膨隆ヲ呈ス。結節ノ 中央部ハ卵圓形ニ同質性顆粒様ニ染色サレタル 典型 的壞死ヲ示シ一部完全ニ 乾酪化モル 所アリ。 壞死部 周圍ニハ類上皮細胞及ビ淋巴球ョリナル 結核性內芽 組織アリ。該組織ノ周園ハ 特ニ 淋巴球ノ 浸潤著明ニ シテ所々ニラングハンス巨態細胞ヲ見ル。結節周圍ノ 粘膜下層ニ於テハ結締織ノ 増殖ヲ 呈スルモ細胞浸 ルコレヲ見ズ。一部多少壞死ノ 像ヲ 呈スル部アルモ 結節トノ交通ナク 結核性內芽組織トノ境界ハ上部及 ビ兩側ニ於テ明カナル モ 細胞浸潤多少周園組織ペノ 波及ヲ示スコノ 部ニ 更ニ1個ノラングハンス巨態細 胞ノ出現ヲ見ル、小血管ハ 多少充血ヲ 呈スルモ特ニス 栓塞擴張等ノ變化ナク固有筋層及ビ 漿膜ニモ 特記ス ベキモノナシ。

結核菌染色法ヲ行ヘルモ結核菌ハ遂ニ發見セズ。

第6例 ■■某 27歳 男

生前特別ナル胃症狀ナシ。 屍體ハ當教室ニ 於テ 死後 6 時間ニシテ剖檢ニ付セリ。

- 1. 臨床的診斷 兩側肺結核
- 2. 病理解剖的診斷(解剖番號 1798)
 - 1. 兩側滲出性肺結核
 - 2. 右肺ノ空洞形成
 - 3. 兩側癒著性肋膜炎
 - 4. 氣管及氣管枝周圍ノ淋巴腺結核
 - 5. 脾 疳
 - 6. 腹膜ノ結節傳播
 - 7. 右腎ノ結節形成
 - 8. 胃ノ結核性潰瘍
 - 9. 小腸及ビ大腸ノ結核性潰瘍
 - 10. 脾臓ノ結節形成
 - 11. 心臓右室ノ擴張

3. 胃ノ病理解剖的所見

胃ノ内容トシテ僅少ノ液様物質アリ粘液分泌亢進セルモ特ニ充血ハ見ラレズ。幽門輪ヨリ10cmノ所小彎ヨリ少シク前壁ニヨリテ1個ノ豌豆大ノ深キ潰瘍アリ。潰瘍邊縁ハ不正鋸齒狀ヲナシ多少堤狀ニ隆起シ・著明ノ彎入アリ潰瘍部ハ他ノ粘膜面ニ比シテ灰白色ヲ呈ス。潰瘍底ハ不正ニシテ中央ニ黄白色點狀結節ノ附著アリ。漿膜面ニ於テハ潰瘍部ニ相當シテ多少瘢痕狀ヲ呈スルモ結節腫脹淋巴腺等ヲ見ズ。

4. 組織的所見

結核菌ハ遂ニコレヲ證明セズ。

第7例 ■某 33歳 女

- 1. 臨牀的診斷 兩側肺結核、腸結核、喉頭結核。 生前特別ナル胃症狀ヲ訴ヘズ。 屍體ハ 當教室 ニ 於テ 死後 12 時間ニシテ剖檢セリ。
- 2. 病理解剖的診斷(解剖番號 1866)
 - 1. 右肺ノ滲出性破壞性結核
 - 2. 兩側肺臟ノ結節形成
 - 3. 右肋膜ノ胼胝形成
 - 4. 喉頭結核
 - 5. 氣管粘膜ノ結核性潰瘍
 - 6. 小腸及ビ大腸ノ結核性潰瘍
 - 7. 胃ノ結核性潰瘍
 - 8. 心臓右室ノ輕度ノ擴張
 - 9. 肉荳蒄肝
- 3. 胃ノ病理解剖的所見

胃ハ内容トシテ多量ノ 粥様物質ヲ有シ 粘膜面ハー般ニ「カタル」性ニシテ充血自家消化ノ像者明ナリ。幽門輪ョリ 10cm ノ所、小樽ニ沿ヒ稍く前壁ニ於テ 3 個ノ卵圓形蠶豆大(1.0×1.2)ノ 後キ 潰瘍アリ。 潰瘍底ハ

多少膨隆シ灰白色ヲ呈スルモ 殆ンド 平滑ニシテ結節 又ハ乾酪性物質ノ附著ヲ見ズ。邊縁ハ平滑ニシテ特ニ 堤隆彎入ナシ。 漿膜面ハ平滑ニシテ著變ナシ。

4. 組織的所見

潰瘍底ハ粘膜下層ニアリテ比較的平滑一部壞死アリ。一部淋巴球ョリナル結核性肉芽組織アリ。一般ニ淋巴球ノ浸潤强の所々群集性ニ類上皮細胞ヲ見ル。該肉芽組織ノ周園ニハ 結締織ノ 増殖著明ナリ。 粘膜下層ノ下部ニ於テハ 細胞浸潤少キモ一部壞死ノ 狀ヲナセル所アリ。併シ潰瘍底部ノ壞死又ハ肉芽組織トノ交通ハコレヲ見ズ。ラングハンス巨態細胞ハ粘膜下層何レノ部ニモ認メラレズ。 潰瘍邊緣ハ 彎入ナキモ 粘膜筋層ノ下部ニ相當シ淋巴球ノ浸潤著シカ 周圍ニ 擴張スルノ像明ナリ。

且ツ邊線ニ於テ既ニ壞死ヲ呈セル部アリ。コ、ニ只1個ノラングハンス巨態細胞ノ出現ヲ見ル。固有筋層ニ於テハ少量ノ淋巴球浸潤ノ波及アルモ筋間組織ノ増殖ハ認メラレズ。 結核菌染色法ニョリテ 潰瘍底部ノ粘膜下層相當深部ニ至ルマデ 多数ノ結核菌ヲ證明セリ。第8例 乗り 数

1. 臨床的診斷 粟粒結核

屍體ハ當教室ニ於テ死後 16 時間ニ シテ 剖檢ヲ 行へ リ。

- 2. 病理解剖的診斷(解剖番號 1910)
 - 1. 兩側肺臓ノ瀰蔓性粟粒結節形成
 - 2. 肝臓心臓腎臓脾臓ノ粟粒結節形成
 - 3. 大網膜及ビ腹膜ノ粟粒結節形成
 - 4. 大腦ノ粟粒結節形成
 - 5. 肝臓ノ排泄性結核
 - 6. 心臓ノ血寒形成
 - 7. 氣管分岐部淋巴腺及ビ肺門淋巴腺ノ結核
 - 8. 小腸及ビ大腸ノ結核性潰瘍
 - 9. 胃ノ結核性潰瘍
 - 10.副脾
 - 11. 腎盂ノ潰瘍形成
- 3. 胃ノ病理解剖的所見

胃ハ内容トシテ約30caノ黄褐色液様ノ物質ヲ有ス。 粘膜面ハ一般ニ粘液分泌亢進シー部自家消化ノ像アリ。幽門ヨリ3cm.ノ所小彎ニ沿ヒテ長徑約1cmノ卵 圓形ノ淺キ潰瘍アリ。底及ビ邊縁ハ灰白色ヲ呈シ底ハ著シク膨隆セルモ清淨ニシテ結節又ハ乾酪性物質ノ附著ヲ見ズ。邊緣ハ正、堤隆ナキモ著明ノ彎入アリ 更二噴門ノ近ク小彎二於テ豌豆大ノ2個ノ 極メテ 後 き潰瘍アリ。邊緣ハ 規則的ニシテ 堤隆彎入ナク 底部 ハ少シク灰白色ヲ呈シ 鬆粗ノ 狀アルモ 結節乾酪性物 質等ヲ見ズ。 漿膜面ハ平滑ニシテ結節、腫脹、淋巴腺 等ノ附者及ど附近臓器トノ癒著ナシ。

4. 組織的所見

遺瘍底ハ粘膜下層ニアリ底部ハ極メテ 鬆粗ニシテ 不規則、中央部ニ於テ著シク膨隆ヲ示ス。邊緣ハ著明ニ 鬱入シ該部ノ 粘膜面ハ少シク 消化性ニ 變化ス。邊緣ニ近キ底部ニ於テ1個ノ小ナル 結核結節ヲ 證明ス。即チ中央部ニ圓形ノ 壌死部アリテー部明カニ 乾酪化シソノ周圍ニ淋巴球ノ 浸潤强ク中ニ 少敷ノ 類上皮細胞ノ出現アリ該細胞浸潤ハ 限局スル事ナク 多少周圍

二波及スルモ而モ他底部及ど邊緣ニ 於テハ 細胞浸潤 比較的少ク且ツ淺ク 粘膜下組織ノ 下部及ど 固有筋層 ハ全ク正常ニシテ變化ナシ。

漿膜部ヲ見ルニ各獨立ニ接近シテ存在セル小ナル2個ノ壊死部アリ。周圍ニハ淋巴球ノ浸潤極メテ强ク該浸潤ハ結締織繊維ノ増殖ニヨリ周圍ト鋭利ニ境セ・ラル。淋巴球浸潤中ニ類上皮細胞ノ出現無キモ而モ壊死部周圍ニ於テ4個ノ著明ナル ラングハンス氏巨態細胞ノ出現アリ。

粘膜下組織ノ中央部ニ 於ケルー小血管ノ 周園及ビ漿 膜部ニ於ケルー小血管ノ周園ニ於テ 限局セル 淋巴球 ノ浸潤アリテ多少血管周園炎ノ 像ヲ呈ス。再三結核菌 染色法ヲ行ヘルモ結核菌ハ途ニ之ヲ證明セザリキ。

第五章 實驗例ノ總括

以上第四章ヲ總括スルニ余ハ肉眼的並ニ組織的 ニ見テ胃ニ結核性變化アリト認メラル、8例ニ 就キ檢索セルモノニシテ是等ハ何レモ他臓器ニ 重篤ナル結核アリ。特ニ肺結核ハ全例ニ於テ之 ヲ見タリ。今此ノ他臟器ノ結核ヲ細別スルニA 表ニ示スガ如シ。

A 表

實驗例	解剖	14	EA	死後			臟	器ノ	結	核		
實驗例 番號	番號	性	年齡	時間	肺	咽喉上 氣道	腸	肝	脾	腎	腹膜	淋巴腺
I	86	\$	21	15時	+	-	+	.+	+	+	+	1 +
II	1017	\$	19	21時	+	+	+	+	+	_	+	+
Ш	1079	\$	27	9時	+	_	+	_	_	_	_	_
IV	1296	\$	46	16時	+	_	_	_		+	_	_
7	1398	\$	53	8時	+	_	+	_			_	_
VI	1798	\$	27	6時	+	_	+	_	+	+	+	+
VII	1866	<u></u>	33	12時	+	+	+	_	_	_	_	_
VØ	1910	<u> </u>	9	16時	+		+	+	+	+	+	+

以上8例中7例ハ潰瘍形成(潰瘍型)ニシテ非潰瘍型ト見ラル、ハ僅ニ1例ヲ得タルノミ。即チ第5例ニ於テ小彎ノ中央部ニ2個ノ半米粒大ノ半バ乾酪化セル結節ヲ見タルモノナリ。此ノ百分率ヲ見ルニ(表B)、

B 表

胃結核ノ種類	胃結核ニ對シ	結核屍ニ對シ
潰瘍型	87.5%	1.11%
非潰瘍型	12.5%	0.16%

遺瘍形成ノ實驗例7例ニ就キ潰瘍ノ數位置及ビ 大サヲ見ルニ單發例2、多發例5ニシテ潰瘍發 生ノ部位ハ 小彎ニ 於ケル 13 個最多數ニシテ以下前壁、幽門部、噴門部ノ順ニ減少シ大彎及ビ後壁ニハ潰瘍ノ發生セルモノヲ見ズ。潰瘍ノ大サハ徑 1cm 內外ノモノ 最モ多ク第 3 例ニ於ケル 3cm×2.5cm ノモノ最大ニシテ第 2 例及ビ第 4 例ノ栗粒大ノモノ最小ナリ。コレヲ明記スルニC表ヲ得。

是等潰瘍ノ肉眼的性狀ヲ見ルニ極メテ多種多様 ナルモ一般ニ淺ク 邊下彎入ハ2—3 ノ潰瘍ヲ除 キ大多數ニ於テ肉眼的ニ容易ニ之ヲ證明スルヲ 得タリ。形ハ大ナル潰瘍ハ槪シテ不規則角形ニ C 表

實易	 	I	I	Ш	IV	۷I	VI	VII	計
幽	見部			5				1	6
噴門	見部	1			2			2	5
大	轡	-							0.
小	彎		3	5	1	1	3		13
前	壁]		6				7
後	壁								0
大	サ	50錢銀 貨大	栗粒大乃至 1.5cm×1cm	豌豆大乃至 3cm×2.5cm	粟粒大乃至 2cm×1.5cm。	豌豆大	蠶豆大	豌豆大乃 至蠶豆大	
į	†	1	4	10	9	1	3	3	

近ク小ナルモノ及ビ中等大ノモノハ一般ニ圓形 乃至卵圓形ノモノ多ク邊緣ハ小ナル潰瘍ハ不正 鋸齒狀ヲナシ堤降著明ナルモノ多キニ反シ大ナ ルモノハ比較的正、堤隆著シカラズ。潰瘍底ラ 見ルニ小ナル潰瘍ニハ乾酪物質及ハ結節ノ附著 セル物アルニ拘ラズ中等大及ビ大ナル潰瘍ニハ カ、ル附著物ヲ證シ得ズ更ニ中等大ノモハ潰瘍 底一般ニ清淨、平滑ナルモ大ナル潰瘍底ハ之ニ 比シテ不規則ナリ。潰瘍ノ邊緣及ビ底ノ充血ノ 徴アルモノハ極メテ少ク寧ロ灰白色ヲ呈セルモ ノ多シ。第3例ノ大ナル潰瘍底ニ於テ出血ノ痕 跡ト思ハル、如キ暗黑褐色ノ附著物ヲ見タルモ ソノ他何レニ於テモ出血又ハ穿孔ノ像ヲ見ル能 ハズ。潰瘍部ニ相當セル漿膜面ノ變化トシテハ 僅ニ第1例ニ於テ結節及ビ腫脹淋巴腺ノ集積ラ 見タルノミニシテ他例ハ何レモ何等ノ變化ヲモ 認メ得ズ更ニ何レニ於テモ胃壁周圍ノ淋巴腺變 化ヲ見出ス能ハザリキ。

潰瘍ノ組織的所見ヲ見ルニ潰瘍底ハ粘膜下組織ニ在ルモノ大多數ニシテ其ノ固有筋層ニ達セルハ僅ニ第1例ノ潰瘍ニ於テ之ヲ見タルノミシリ。圓形細胞浸潤ハ何レモ底部ニ比較的少ク且、少數例ニ於テ之ヲ見タルノミナリ。之二反シ多緣替入部附近ニ於テハ何レモ圓形細胞浸潤最上數分更ニ該浸潤ハ周圍組織特ニ粘膜筋層ノ方の外域大蔓延ノ徴明カナリ。固有筋層ノ筋配列ハウ酸大蔓延ノ微明カナリ。固有筋層ノ筋配列ハ第1例ヲ除キ全例ニ於テ全ク正常ナリ。鏡檢的ニ結核結節ヲ潰瘍周圍部ニ證明セルモノハ比較的

少ヶ第1例第2例及ビ第8例ニ於テ僅ニ粘膜下組織ニ之ヲ證明セルノミナリ。潰瘍附近ノ小血管ノ充血擴大ノ像ハ屢ミ之ヲ見ルモ明カナル血管變化、特ニ其ノ栓塞性變化トモ云フベキモノハ之ヲ認メズ。ラングハンス氏互態細胞ハ7例中4例ニ於テ之ヲ證明セルモソノ數ハ極メテの潰瘍滲線部又ハ潰瘍部ヨリ距リタル所ニ於テ1個乃至數個ノ出現ヲ見タルノミナリ。漿膜ニ鏡檢的變化ヲ認メタルハ僅ニ第8例ノ1例ニシテ即チ淋巴球浸潤及ビ結締織ノ増殖ニ依り周圍ト銳利ニ境サレタル壞死部ヲ見タリ。

以上ノ組織的所見ヲ總括スルニ(表D)、

D 表

實驗例	á	細胞浸泡		筋層	漿膜	巨鵬	
例	邊緣	底 筋層		筋層 變化	漿膜 變化	巨態 細胞	
I	+	+	++	+	+	+	
I	++	+	++	_	_	+	
Ш	+	+	-		_	_	
ΙV	##	++	+	_		_	
٧	++	+	_	_	_	+	
VI	++	+	±	_	_	_	
ΠV	##	+	_	_	+	+	

第5例ハ非潰瘍型即チ小彎ノ中央部粘膜下層ニ 於テ2個ノ結節ヲ形成セルモノニシテ該結節周 園ニハ結締織ノ増殖アリテ其ノ部ニカナリ多數 ノラングハンス氏巨態細胞ヲ認メ結節ノ中央ハ 完全ニ乾酪化セルモノナリ。結節部ニ相當セル 粘膜及ビ固有筋層以下ニハ何等鏡檢的ニ變化ヲ 見ル能ハズ。 以上1全8例二就キ結核菌染色法ラ行へル結果 ヲ見ルニ第1例第2例第4例及ビ第7例14例 ニ於テ菌ヲ粘膜下組織ニ 僅ニ 辛ジテ 證明スル ヲ得タリ。唯第7例ニ於テハ粘膜下層ニ相當多 数1菌ヲ證明シ得タリ。之ヲ表示スルニ(表E) 更ニ臨床的症狀ヲ見ルニ全8例ヲ通ジ生前何等

表D) 特二胃症狀

第六章 考 按

第一節 胃結核ノ統計的觀察ニ就テ 余ハ當教室ニ於ケル總剖檢例1910例中結核屍6 17例ナルニ胃結核ヲ有スルモノ8例ヲ得タリ。コ レヲ百分率ニ換算スレバ結核屍ハ全屍數 132.3 %ニシテ約其ノ $\frac{1}{3}$ ヲ占メ胃結核ハ全屍數ノ0.41%結核屍數 / 1.29 % ナリ。 多 ク ノ 文獻 ニ 於 テ 最信ズベキ 統計トシテ 一般ニ 引用サレ居ルハ Glaubitt 氏及で Gossmann 氏ノ統計ニシテ令 コノ兩氏ノ統計數ヲ平均スルニ全屍數ニ對シテ ハ0.35 %結核屍數ニ 對シテハ1.5 %ナル 數ヲ 得大體ニ於テ余ノ統計ハ此ノ兩氏ノ統計ノ平均 数ニ一致セルヲ見タリ。從來諸家ノ頻度ニ關ス ル統計ヲ見ルニ其ノ間可ナリノ高低アルハ恐ラ ク實驗材料ノ少數ナルカ及ハ精細ナル組織的檢 索ヲ缺ケルニ依ルモノ、如ク余ハ數多キ剖檢例 ヨリ肉眼的ニ結核性變化ヲ疑ハシムル 如キ 40 例有餘ヲ選ビ組織的檢索ノ結果8例ヲ以テ眞ノ 結核性變化トナセルモノナリ。

性ニ關シ本邦ニ於テ文獻ニ 現レタル 33 例中不明 12 例 ヲ除キ 31 例ニ就キテ見ルニ男 23 例ニ對シ女 8 例ニシテ其 1 比約 3:1 トナレリ。余 18 例 ハ男 6 例女 2 例ニシテ 3:1 ヲ示セリ。即チArloing 氏 1 報告セル所ト一致セリ。勿論僅カ8 例ニ就キ其 1 性別ヲ云爲シ難シトハ云へ3:1ナル數ハ一般ニ男性ニ多キモノト考フルニハ充分ナリ。

年齡的關係 ラ 見ルニ 余ノ實驗例ハ20 歳代3 例10 歳代30 歳代40 歳代50 歳代及ど10歳以下各1 例ニシテ 其ノ平均年齡ハ31 歳ナリ。 コレラ本邦ニ於ケル報告例ノ平均年齡29 歳ニ 比較スル時ハ大體ニ於テ其ノ一致ナ見ルモ唯 Arloing

E 表

菌ヲ證明セ ザリシモノ	粘膜下組織ニ菌 ヲ證明セルモノ		菌ノ陽性率
	菌ノ多数ナルモノ	1	
4	菌ノ少數ナルモノ	3	50%
l	計	4	i

特ニ胃症狀ヲ訴ヘザリキ。

氏ノ平均年齢 41 歳ト比較スル 時ハ多少! 距り有り。サレド余ノ結果ハ 20 歳代ニ 最モ多ク 其ノ年齢的關係ハ肺結核ノ罹病年齢即チ一般結核症ノ罹病年齢ト相似タルヲ見タルハ寧ロ當然ト首肯サル、所ナリ。

第二節 他臓器ノ結核トノ 關係ニ就テ

實驗例 1 8 例 1 何 レモ他臟器 二重篤ナル結核アリ。即 チ

肺結核ヲ有セシモ	1	8 例 (全例)
腸結核ヲ有セシモ	1	7例
脾臓ニ結核ヲ有セ	シモノ	4 例
腎臓ニ結核ヲ有セ	シモノ	4 例
腹膜ニ結核ヲ有セ	シモノ	4例
淋巴腺ニ結核ヲ有	セシモノ	3 例
肝臓ニ結核ヲ有セ	シモノ	3例
咽喉、上氣道ニ結	核ヲ有セシモ	ノ 2例

コレラ Gossmann 氏 / 28 例 = 就イテノ成績 ニ比較スルトキハ

肺結核ヲ有セシモノ 28例(全例) 腸結核ヲ有セシモノ 25例 咽喉、上氣道ニ結核ヲ有セシモノ 14例 肝臓ニ結核ヲ有セシモノ 11例 腎臓ニ結核ヲ有セシモノ 9例 脾臓ニ結核ヲ有セシモノ 9例 腹膜ニ結核ヲ有セシモノ 5例

概シテ一致セルヲ見ルモ唯 Gossmann 氏ノ例 ハ咽喉上氣道ノ結核多キニ反シ膜膜ノ結核比較 的少キニ拘ラズ余ノ例ニ於テハコレニ反シ咽喉 上氣道ニ少ク腹膜ニ比較的多キヲ見タリ。更ニ 注目スベキハ余ノ例モ Gossmann 氏ノ場合ト 同様ニ肺臓ニ於ケル變化ハ大部分破壞性肺結核ナリシ事ナリ、Hübschmann 氏、山極氏等ハ肺ニ破壞性結核有ルトキハ喀痰ト共ニ多量ノ結核菌ヲ嚥下スル事ニヨリ胃ニ結核ヲ發生スト云ヒ、關氏ハ上氣道、咽喉、胃ト追及的ニ結核潰瘍アル事實ニ依り胃ノ結核ヲ以テ嚥下性ニ發生セルモノナリト説明セリ。Rokitansky 氏ハ胃結核ヲ以テ廣汎セル腹結核ノ部分現象ナリト云ヘルモ Gossmann 氏及ビ余ハ共ニ少數乍ラ胃ニ結核有ルニ拘ラズ腸管ニ全ク結核ノ存セザル例ヲ經驗シ Littens 氏亦腸管ノ全ク健全ナル胃結核潰瘍ヲ報告セリ。更ニ余ハ他ノ2例ニ於テ腸ノ結核性變化極メテ輕度ナルヲ見タリ。

第三節 胃結核ノ種類ニ就テ 諸學者ハ各獨自ノ病理解剖學的見地ヨリシテ種々 ノ分類ヲナスモ所謂潰瘍型ト増殖型(腫瘍型、肥 大硬化型)トノ二種ノ存在ハ 諸家ノ 一致シテ認 ムル所ニシテ Nöllenberg, Batzner, Spengler 氏等ハ胃結核ヲ總テ此ノ二種ノ中ニ屬セシムル 事トセリ。今問題トナルハ粟粒結核、結節樣結 核炎症性硬化結核、纖維性結核 (Boncett 氏) 及 ビ膿瘍型(Keller)氏ナリ。元來一般ニ結核性變 化ハ極メテ多種複雑ナル病理機轉ニ依り進行ス ル點ヨリ見レバ是等諸型ノ間ニハ可ナリノ移行 有リテ劃然區別シ得ザル場合少カラズト考ヘラ ル。即チ炎症性硬化性結核及ビ纖維結核ハ潰瘍 型ト増殖型ノ移行タルベク又粟粒結核ト結節型 トモ劃然區別シ得ザルベシ。唯此處ニ注目スベ キハ余ノ第5例ニシテ Schlesinger 氏ノ報告 ニ於ケルト同様大結節ノ膿瘍ヘノ移行著明ナル モノナリ。之ニ依リテ見レバ胃ニ形成セラレタ ル結核結節ハとが破壞シテ潰瘍形成ニ至ルモノ ト潰瘍ヲ形成セズシテ擴大シ軟化シテ膿瘍へ移 行スル物ト二樣ノ變化ヲナス物ト考ヘルガ至鴬 ニシテ此ノ膿瘍形成ニ至レルモノハ潰瘍型又ハ 增殖型トハ完全ニ 區別サルベキモノナ リ ト 信 ズ。而シテ未ダ乾酪化ノ見ラレザル結節ハ是等 二型ノ中何レカニ進ムベキ初期ノ狀態ニ在ルモ ノト考へ余ハ一般結核病理特ニ滲出、産出ノ兩

機轉ヲ顧慮ニ入レ次ノ三種ニ區別スルヲ可ナリ ト信ズ。

- 1. 潰瘍型
- 2. 增殖型
- 3. 膿瘍型

第四節 病理解剖學的形態學的 觀察=就テ

(1)潰瘍型胃結核、余ハ87%ニ於テ本型ヲ經驗 シ之ヲ Broders 氏ノ81%=比較スル時ハ略こ 其ノ一致セルヲ見テ、本型ハ胃結核ノ大多數ヲ 占ムルコトヲ認メタリ。潰瘍ノ發生部位ニ關シ 余ハ小轡ヲ以テ好發部位ナリト爲シ Gossmann 氏ノ報告及ビ本邦ニ於ケル 文獻ヲ 綜括セル 結 果ト同様ナルヲ知レリ。唯 Broders 氏及ビ Hübschmann 氏ソ云フ所ト多少異レリ。 潰瘍 ノ單發多キカ將又多發多キャニ就テハ諸家ノ意 見一致セザルモ、余ハ單發ニ比シ多發ノ遙カニ 多キヲ見タリ。潰瘍ノ大サハ粟粒大ヨリ手掌大 ニ至ル種々ノ大サ報告サレ居ルモ余ハ餘リ大ナ ルモノヲ見ザリキ。唯余ハ潰瘍ノ組織的所見ヨ リシテ潰瘍!陳舊ナル程其ノ大ナル傾向アルラ 認メタリ。潰瘍ノ性狀ハ一般ニ腸ノ夫レト大差 ナキモノトセラレ(Rokitansky, Hübschmann, Prezewoski, Gossmann)、余モ亦其ノ類似セル ヲ見タリ。唯腸管殊ニ大腸ニ於テハ屢ヽ其赤痢 樣潰瘍ヲ見ルニ反シ余ハ胃ニ於テ全ク之ヲ見ザ リキ。更ニ腸ノ夫レト異リ漿膜ハ平滑ニシテ變 化ナク、腸管ニ於ケル如ク漿膜面ヨリ直ニ之ヲ 診斷スルヲ得ズ。此ノ漿膜ニ變化少キ事實ハ胃 壁ノ構造上强靭ナル組織ヨリ成ル點及ビ其ノ淋 巴管ノ走行ニ依ルモノナラン。潰瘍ノ二次的變 化トシテ Gossmann 氏ハ結核自己ノ變化ノ外 ニ胃液ノ消化作用ナルモ ノ ヲ 考へ Katarina-Keller 氏ハ之ヲ全ヮ結核其ノ物ノ變化ニ歸シタ り。余ハ大ナル潰瘍ハ一般ニ邊緣正、底ハ乾酪 物質、結節等ノ附著無クシテ、比較的清潔ナル ニ反シ、小ナル潰瘍ハ 邊緣不正ニ シテ 底ニ結 節、附著物ノアル點ヨリ見テ二次的變化ニ就キ Gossmann 氏ノ云ヘル如ク胃液ノ消化作用ヲ相

當重要視スベキモノト思考ス。潰瘍底ハ一般ニ 淺ク粘膜下組織ニ在リト云ハレ余モ亦其ノ事實 ヲ認メタリ。サレド其ノ細胞浸潤ノ所見ニ就キ テハ諸家ノ意見必ズシモ一致セザレドモ Prezewoski 氏及ビ Simmonds 氏ハ共ニ余ト同様ニ 特ニソノ邊緣ニ著シキヲ主張セリ。之ニ依リテ 見レバ炎症ハ深部ニ波及スルヨリモ寧ロ彎入部 ョリ次第ニ四周ニ擴リ其ノ部ノ粘膜部モ之ニ從 ツテ速ニ浸淫セラレ斯クシテ潰瘍が周圍ニ擴大 シ行クモノ、如ク此ノ爲ニ潰瘍邊緣ノ堤隆增殖 比較的僅少ナルモノト考ヘラル。腸結核ニ於テ ハ其ノ邊緣ニ屢、典型的ナル結節又ハ乾酪化部 ヲ證明セラル、ニ反シ胃結核ニ於テハ典型的ナ ル結核性變化ハ認メラレザルモノ、如ク特ニ潰 瘍底部ニ於ケル 粘膜下組織ニ著シ。Gossmann 氏ハ 此ノ事實ヲ 消化性變化ニ 依ル モノトナセ リ。ラングハンス氏巨態細胞ノ出現ニ就キ桂田 氏ハ其ノ甚ダ少數ナルヲ記シ大槻氏ハ其ノ多數 ナルラ 云へ ルモ 余ハ桂田氏ノ言ラ至當ナリト ス、コレ胃ニテハ腸管ニ於ケル如キ明カナル結 核性變化ヲ示サベルガ爲メナラン。

結核菌ヲ組織的ニ證明スルノ極メテ困難ナルハ 諸學者ノ意見一致シ余モ辛ジテ半數ニ於テ之ヲ 證明スルヲ得タリ。Broders 氏ハ167 例中結核 菌ヲ證明セルモノ27 %ニ過ギズト云へり。 サ レド Holzmann 氏が103 枚ノ連續切片ヲ作リ 漸ク1個ノ結核菌ヲ證明シタルニ見レバ其ノ難 事タルニ止リ必ズヤ全例ニ於テ之ヲ證明シ得ル モノナラン。

(ロ)膿瘍型胃結核 余ノ實驗例第五ハ結節ノ中央ハ完全ニ乾酪化シ且ツ結節周圍ニ結締織ノ増殖アリテ相當古キ結核竈ノ像ヲ呈スルニ拘ラズ該部ヲ覆フ粘膜層ハ多少ノ膨隆アル以外全々其ノ正常ナルヲ示シ居レリ。此ノ事實ョリ考フレバ結節ハ崩壤シテ潰瘍ヲ形成スルニ至ラズシテ比較的早期ニ乾酪性變化ニ陷リ液化スル傾向强カリシ爲メナラン。

更ニ本例ハ鏡檢的ニ極メテ定型的ナル結核像 チ 示シ且ツ細胞浸潤部ニ於テ著明ナル可ナリ多數 ノラングハンス氏巨態細胞ノ出現ヲ認メタリ。 而シテ其ノ粘膜ノ全ク正常ナルヲ見レバ潰瘍型ニ於テ典型的ナル結核性變化ヲ示サベルハ所謂 Gossmann 氏ノ消化性變化ニ依ルノ事實ヲ裏書 スルモノト思惟ス。

第五節 胃結核ノ稀有ナル 理由ニ就テ

胃液ノ殺菌力ヲ以テ胃結核ノ稀有ナル理由ヲ說 明セントスルー派(Ziegler, Simmonds, Holzmann) ニ對シ Kaufmann 氏ハ結核患者ハ一般 ニ胃際酸含量著シク減少セルモノナリト結論セ ル Curschmann 氏ノ研究ヲ根據トシテ之ニ反 對セリ。又 Straus, Würtz ノ兩氏ハ38℃ ニ 温メタル犬ノ胃液中ニ於テ結核菌ハ6時間ニ渉 リ増殖發生シ 24 時間ノ後ニ 至り初メテ 其ノ死 滅セルヲ見テ本實驗ヨリモ更ニ一層結核菌ニ對 シ有利條件ニ在リト考へラル、人體胃中ニ於テ ハ結核菌ニ對シ何等ノ防備無キモノナリト述べ タリ。 Ziegler 氏等ノ所説ヲ反馭スルー派ハ 屢ミ此ノ Straus, Würtz 兩氏ノ文獻チ引用セ リ。サレド余ハ例へ結核菌ニ對シ人體胃液が極 メテ殺菌力乏シキモノトシテモ胃中ニ於テハ腸 管ニ於ケル如ク結核菌ノ爲メニ好條件ノ下ニハ 非ザルベク從テ胃液作用ヲ全然除外視セントスル ハ寧ロ不當ナリト考フ。胃壁ノ解剖的條件即チ 其ノ淋巴濾胞ノ僅少ナル事ニ依リテ之ヲ說明セ ル Ghon, Kudlich ノ兩氏 Bätzner 氏等ニ對シ ・小塚氏ハ慢性胃加答兒アル時ハ淋巴濾胞ノ増殖 有リテ結核ノ發生ニ便宜ヲ與フベキ筈ナルニ慢 性胃加答兒必ズシモ胃結核ニ伴ハザル事實ヲ指 摘シテ之ニ反對セリ。又Prezewoski氏、Barbacci 氏等ハ胃結核例ニ於テ淋巴濾胞 ノ 肥大又 ハ 増 殖アルヲ見テ淋巴濾胞ノ少數ナルヲ以テ其ノ理 由ト考へタレド肺結核特ニ慢性肺結核ノ末期ニ 於テハ屢、胃ニ淋巴濾胞ノ肥大増殖ヲ見ルハ吾 人ノ日常經驗スル所ニシテ之ニ依リテ考フレバ 兩氏ノ所見モソノ意義稀薄ナルモノナリ。サレ ド一般ニ先ヅ結核菌ガ淋巴濾胞ニ攝取セラレ為

ニ結核ラ發生スルモノタル以上胃ニ於テハ腸管 ニ比シテ遙ニ僅少ナル事實ハ又見逃シ得ザル事 實ナリト思惟ス。Katarina-Keller 氏ハ胃運動 ハ活潑ニシテ内容物ガ速カニ腸管ニ移行セラル ル爲ナリト述べ之ヲ Brieger 氏ノ重症結核患 者ノ「ザロール」試験ニ於テ早キハ48分遅キモ 97 分ニシテ 尿ニ「サルチル」 酸反應 / 現 レタル ヲ見、結核患者ノ胃運動機能ハ常ニ全ク正常ナ リト結論ヲ以テ説明シ居レリ。ソレ故ニ其處ニ 又一脈/理由アルベシ。更ニ全身粟粒結核/場 合ニ於テモ胃ニ粟粒結節ヲ證明スル事ハ極メテ 稀ナリ。今此ノ理由ヲ考フルニ胃ハ常ニソノ渾 動機能活潑ニシテ (Brieger 氏) 従ツテ血流又盛 ニシテ爲ニ血行ニ依ツテ來ル結核菌ノ毛細管ニ 止マルノ遑ナキニ依ルベク之ヲ一般ニソノ機能 盛ナル臓器例へバ心臓、分泌臓器等ニ結核ノ少 キ事實ニ比較スル時ハソノ妥當タルヲ云ヒ得べ ケン。

之ヲ要スルニ從來ノ諸說ハ何レモ胃結核ノ稀有 ナル理由ニ關シ若干ノ說明ヲ與へ得ベキモ余ハ 是等ノ諸條件ノ外ニ更ニ Kaufmann 氏ノ云 フ胃ノ結核菌ニ對スル先天性感受性ノ乏シキ事 即チ臓器ノ比較的発疫性モ與ツテカアリト信ズ 即チ諸條件ガ合働シ相倚リ相助ケ胃結核ノ發生 出現ノ稀有ナルヲ招來スルモノナルベケン。

第六節 胃結核ノ感染機轉ニ就テ胃結核ノ感染經路トシテ第二章ニ述ベタル四經路ハ一般ニ其ノ何レノ場合モ存シ得ベキモ是等ノ中何レノ經路ニ依ルモノガ最モ多キャ更ニ如何ナル所見ヲ根據トシテ其ノ感染經路ヲ決定スベキャノ問題ナリ。嚥下性直接傳染(播種傳染)ハ Ranke 氏ノ所謂 Kanalikuläre Infektionニシテ Hübschmann 氏、山極氏等ハ此ノ經路ヲ以テ最モ多シトナシ Arloing ハ動物實験ニ依ル食餌試験ハ常ニ不成功ニ終リタルニ反シ結核菌ヲ血行ニ注射スル事ニ依リテ胃結核ノ發生ニ成功シタルヲ以ツテ胃結核ハ總テ血行感染ニ依リ發生スルモノナリト主張セリ。Dewey 氏ハ大多数ハ淋巴行ニ依ツテ來ルモノト考へPfanner

氏ハカ、ル場合ハ理論的ニハ存在シ得ルモ實際ニハ殆ンド皆無ナルモノト極言セリ。又胃壁周圍ヨリ直達性ニ來ルモノハ本質的ノ胃結核感染經路ニハ非ザルモカ、ル症例モ數例報告セラレタリ。

直接傳染ニハ肺ニ於ケル破壞性變化ガ最モ重要 視セラレ(山極氏、關氏)、Gossmann 氏ハ栓塞性 血管變化ノ存在ヲ以テ血行性感染ヲ主張スル要 素トナシ河合氏ハ潰瘍ハ多ク多發性ナル所ヨリ 考へ先ヅ血行性ニ多數ノ粟粒結節ヲ作リ之ガ破 壞シテ二次的ニ潰瘍ヲ形成セルモノナリト云へ リ。Dewy 氏ハ胃壁ニ廣範ナル結核性淋巴管炎 存スルヲ見テ淋巴系ニ依ル感染ナリトセリ。 余ハ自己ノ實驗例8例ニ就キ詳ニ其ノ傳染經路 ヲ檢討セルモ第1例、第5例及ビ第8例ニ於テ 能ク其ノ感染機轉ヲ確定シ得タルノミニシテ他 ノ5例ニ於デバ何レモ其ノ不可能ナルヲ知レリ。 卽チ第1例ニ在リテハ腹膜後部、腸間膜、門脈 周圍、縱隔竇等ニ乾酪性結核性淋巴腺炎アリ胃 漿膜面ニハ蠶豆大ノ乾化セル淋巴腺ノ集積ヲ見 タリ。組織的ニハ潰瘍ハ其ノ潰瘍面ノ大サニ比 シテ比較的深々、結核性變化ハ粘膜下層ヨリ筋 層ニ波及シ居レリ。且ツ漿膜內淋巴結節乾酪化 セルモノアリタル點ヨリ見レバ腹部淋巴腺ニ結 核竈アリテ之ガ胃淋巴腺ヲ侵シ更ニ逆行シ胃粘 膜ヲ侵カシ潰瘍ヲ形成セルモノナルベシ、之レ 胃壁周圍ノ結核性變化ガ直達的ニ侵襲シ來レル 1例ト見做スベキモノニシテ必ズシモ眞ノ意味 ニ於ケル傳染經路ニハ非ザルモ Struppler 氏 Gossmann 氏等ノ報告例ト其ノ規ヲーニスルモ ノナリト考へラル。第5例ハ胃粘膜下層ニ大ナ ル結節ヲ形成セル1例ニシテ肺ニ破壞性變化ア リトハ云へ胃粘膜ハ全ク完全ニシテ結核菌嚥下 ニ依ル直接粘膜面ヨリノ菌侵入ハ考ヘラレズ、又 淋巴腺結核モ之ヲ證明シ得ズ。依ツテ該結節ハ 他職器ニ於ケル一般結節形成ト同樣ニ血行ニ依 リテ發生セリト斷ゼザルヲ得ズ。コ、ニ注目スベ キハ本實驗例ハ他臟器ニハ全ク結節形成ヲ發見 シ得ザル事ナリ。Struppler 氏ハ胃ニ血行性ニ

結核ヲ生ズルナラバ必ズ他臓器ニモ血行性ニ結 節ヲ證明スルモノニシテ胃ニ於テノミ血行性ニ 結核ノ發生スルコトナシト云へり。サレド本例 ョリ見テ他臓器ニ結節形成無クトモ胃ニ血行性 ニ結核ノ發生シ得ルモノナルヲ知レリ。第8例 ハ氣管周圍ノ淋巴腺結核ヲ原發竈トセル粟粒結 核ノ1例ニシテソノ肺ニ於ル病變ハ極メテ新鮮 ノ像ヲ呈シ到底豫テヨリ喀族ヲ嚥下セルモノトハ 考へラレズ。依ツテ胃ニ於ケル潰瘍ハ先ヅ粟粒 結核ノ一部分現象トシテ胃壁ニ結節ヲ形成シ之 ガ二次的ニ破壞シテ潰瘍ヲ發現セシモノト思惟 サル。本例ハ同時ニ腸管ニ於テモカ、ル結節ガ 二次的ニ破壞シテ潰瘍ノ形成ニ至レリト思ハル ル多クノ所見ヲ認メタリ。而モ本例ニ於テハ胃 壁ニ何等 Gossmann 氏ノ云フガ如キ小血管性 變化ヲ見ザリキ。コレ小血管ニ變化無キガ故ニ 直ニ非血行性ナリトナスラ 得ザルラ 證ス ルナ リ。他ノ5例ハ何レモ組織的乃至ハ病理解剖的 所見ヨリシテ其ノ傳染經路ヲ確定シ得ザリキ。 例へバ Gossmann 氏ノ述ベタル如キ血管變化 ヲ發見シ得ズトモ該血管變化ガ潰瘍形成ノ爲ニ 破壞サレ失ハレテ遂ニ之ヲ發見スル能ハザル場 合モ有リ得ベク、又破壞性肺結核ハ屢、見ラル ルニ反シ胃結核ハ極メテ稀ニ遭遇スル以上如何 ニ肺ニ破壞性變化有リトモ夫レヲ以テ直ニ胃結 核ガ結核菌嚥下ニ依ル粘膜面ヨリノ直接傳染ナ リトナシ得ズ。更ニ他臟器ニ於ケル結核結節形 成ノ有無モ胃結核發生經路ノ說明ニ關係無キコトモアラン。之ヲ要スルニ第5例又ハ第8例ニ見タル如キ特種ナル變化ヲ呈セル時、又ハ潰瘍形成ノ極メテ初期リ狀態ヲ發見シ得タル場合、或ハ第1例ニ於ル如キ特別ナル場合ニ於テノミシテ總テノ病變ノ傳染機轉ヲ確定シ得ルモソニシテ總テノ場合ニ於テ之ヲ確定スルハ不可能ノ事ニ屬カリ場合ニ於テンス。從テ從來本邦ニ於ケル多クノ報告ニ見ルカノ其ノ組織的所見又ハ病理解剖的所見ヨリシテス。後テ経來本邦ニ於ケル多のノ報告ニ見ルカノ感アリ。

余ノ實驗例ハ總テ他ニ重篤ナル結核ヲ有セシ例 ニシテ何レモ續發性ニ發生セリト考ヘラル、者 ナリ。今原發性胃結核ノ存在ヲ主張スル諸家ノ 文獻ヲ見ルニソノ根據トスル所ハ胃以外ノ臟器 ニ於テ結核性變化ヲ見ザリシトナスカ(小塚氏、 齋藤氏)若シクハ 胃ノ結核病竈ト他臓器ノ 夫レ トヲ肉眼的乃至ハ組織的ニ比較シ其ノ新舊ノ差 ヲ検討シタルモノ (Fischer-Defoy 氏 Cullinan 氏)ナリ。サレド肉眼的乃至ハ 顯微鏡的ニ 病竈 ノ新舊ヲ決定スルハ極メテ困難ナル場合多シ。 更ニ結核感染ノ場合ニ於テハ、勿論病理解剖的 ニモ稀レニソノ病竈ヲ發見シ得ザル事アルヲ考 フレバ胃結核ヲ以テ原發竈ト看做スヨリ寧ロ他 ノ臓器ニ其ノ原發竈ヲ求ムルコト合理的ナリト 信ズ。何レニセヨ非難ナキ原發性胃結核ハ蓋シ 稀有ノモノニ屬スルモノナラン。

第七章 結 論

- 1. 胃結核 / 頻度ニ關シテ余ハ當教室ニ於ケル 總剖檢例ニテ 全屍數ニ對シ 0.41 %結核屍ニ 對 シ 1.29 %ナル 數字ヲ得タリ。 性別ニ關シテハ 男子ハ女子ョリモ 3 倍 / 頻度ヲ示シ年齢的ニハ 青壯年ニ多ク一般結核症 / 罹病年齢ト相似タル ヲ見タリ。
- 2. 胃結核ヲ次ノ如ク分類セリ。
- 1. 潰瘍型、2. 膿瘍型、3. 増殖型、 而シテ胃結核ノ大多數ハ潰瘍型ナリ。
- 3. 胃ノ結核性潰瘍ハ多酸スル場合多ク其ノ好

- 發部位ハ 小彎 ナリ。 大サハ1cm 内外卵圓形乃 至圓形ノモノ多ク線下彎入アリ中等大以上ノモ ノハ邊緣正ニシテ堤隆ナク小ナルモノハ之ニ反 シ且ツ底ニ結節乾酪物質ノ附著アリ。
- 4. 潰瘍底ハ粘膜下組織ニ在リ、淺クシテ細胞 浸潤ハ邊緣ニ 强 ク 固有筋層 / 侵サル、コト少 シ。
- 5. <u>ラングハンス</u>氏巨態細胞ヲ證明スル**場合多** キモ其ノ敷ハ極メテ少敷ナリ。
- 6. 潰瘍ニ相當セル漿膜ニ變化アル者ハ少シ。

- 7. 潰瘍ハ定型的ナル結核性變化ラ示サズ之レ 所謂 Gossmann 氏ノ消化作用ニ依ルモノナラン。
- 8. 結核菌ハ 50 %ニ於テ 之ヲ 粘膜下組織ニ證 明セリ。
- 9. 胃結核 / 稀有ナル理由トシテ種々 / 所說舉 ゲラレ有ルモ一定 / モノナキガ如シ恐ラクハ諸 條件 / 合働ニ依 リ 惹起セラル、モノナラン。 10. 胃結核ハ何レモ續發性ニシテソ / 感染方法 トシテハ直接感染血行性感染淋巴行性傳染周圍 臓器ヨリ / 直達性侵襲 / 四種存スルモ其 / 何レ ノ經路ニ依ルカヲ決定シ得ルハ或ル特種ナル變

1) Albu, Kraus u. Brugsch, Spezielle Path. u. Therap. Bd. V. S. 993. 2) Aschoff, Path. Anat. Bd. II. 1928. S. 751. 3) Arloing, Zit. n. Konjetzny 4) Barbacci, Eine seltene Form von Tuberculose des Magens. Ref. Centrbl. f. Allg. Path. Bd. 4. 1893. S. 760. 5) Bätzner, Beitrag zur Magen tbc. Berl. Kl. Wschr. Nr. 52. 1920. S. 1237. 6) Brieger, Über die Funktion des Magens bei Phthisis Pulm. D. M. Wschr. 1889. S. 269. 7) Broders, Zit. nach Konjetzny. 8) Cullinan, A case of Tbc. of the Stomach. J. of Path. 33. 1930. 9) Dewey, Tuberculosis of the Stomach with extensive Tbc. Lymphangitis J. of Infd. Vol. 12. 1913. p. 236. 10) Fischer-Defoy. Ausgedehnte Magen tbc. Centrbl. f. Allg Path. Bd. 17. 1906. S. 4. 11) 古村, 滿洲醫學會雜誌. 第七卷. 第二號. 12) Ghon, Kudlich, Handbuch d. Kinder tbc. Bd. 1. 1930. S. 73. 13) Gossmann, Über das Tbc. Magengeschwür Mitt. a. d. Grenzgebiet d. Med. u. Chir. Bd. 26. 1913. S. 771. 14) Hamperl, Über örtliche Vergesellschaftung von Krebs u. Tbc. Zschr. f. Krebsforsch. Bd. 23. 1926. S. 430. 肥田、 東京醫學會雜誌, 第二卷, 第九號, Holzmann, Über Magen tbc. M. M. Wschr. 1909. Nr. 4. S. 207. 17) 堀地、 十全會雜誌. 第 三七卷. 第四號. 18) Hübschmann, Path. Anat. d. Tbc. 1928. S. 300. 19) Katarina-Keller, Zur Pathogense u. Therapie d. Magen tbc. Beitr. Z. Kl. Chir. Bd. 88. 1914. S. 586. 20) 桂田、 日 本內科學會會誌第一囘. 21) Kaufmann, Spez. Path. Anat. Bd. I. 1931. S. 626. 22) 木下, 內 23) 木積, 日本病理 外治療. 第17卷. 第3號. 學會會誌. 第四號. 24) 小出, 千葉醫學會雜誌.

化ラ呈セル者ノミニ止り其ノ多數ノ場合ニ於テ ハ之レヲ決定スルコト不可能ナリ。

[附記]本研究/要旨ハ昭和8年9月22日新潟圏 科大學病理學教室第86回集談會ニ 於テ 講演セルモノナリ。

實驗例1第1例及ビ第2例ハ既ニ當教室ニ於テ 三田氏並ニ關氏が各々1例報告トシテ發表セル モノナルモ余ハ當教室ニ於ケル材料ニ依ル總括 的研究ヲナス目的1爲ニ兩氏1研究結果1大要 ヲ再ビ記載スルコト、セリ。

擱筆ニ臨ミ終始御懇篤ナル御指導ト御校関トラ 賜リタル恩師川村教授ニ深甚ノ謝意ヲ表ス。

獻

文

第二卷. 第四號. 25) Konjetzny, Handbuch d. Path. Anat. u. Histol. Bd. IV/2 1928. S. 1040. 26) 河合, 東京醫事新誌. 2636 號. 27) Letulle, Ref. Centrbl. f. Allg. Path. Bd. 4. 1893. S. 760. 28) Litten, Ulcus ventr. tbc. V. A. Bd. 67. 1876. S. 615. 29) 槇, 日本外科學會雜誌. 第28 回. 第 5號. 30) 武藤, 朝鮮醫學會雜誌. 第54號. 31) 中山, 東京醫學會雜誌. 第23卷. 第14號. Nöllenberg, Ein Beitr. zur Tumorform d. Magen tbc. Beitr. z. Kl. Chir. Bd. 99. 1916. S. 691. 33) 奥田, 加藤, 「グレンツゲビート」 第1卷. 第 34) Orth, Experimentelle Untersuchungen über Fütterungs tbc. V. A. Bd. 76. 1879. S. 217. 35) 大槻, 日本消化器病學會雜誌. 第6卷. 36) 小塚, 國井, 診斷ト治療. 第17卷. 第3號. 37) Patronicola, Zur Kasuistik d. tumorbildende Magen tbc. W. Kl. Wschr. Nr. 33, 1931, 38) Pfanner, Kasuistische Beitr. zur Kenntniss. d. tbc. Pylorusstenose. mitt. a. d. Grenzgebiet d. Med. u. Chir. 1915. S. 83. 39) Prezewoski, Gastritis tbc. V. A. Bd. 167. S. 424. 40) Rokitansky, Lehrbuch d. Path. Anat. Bd. 3. 1861. 41) 齋藤、 岡山野學會雜誌. 第245號. 42) 三田, 北越醫學會雜誌. 第29年. 第1號. 43) Schlesinger, Die Pylorus tbc. u. d. tbc. Wandabscess des Magens m. M. Wschr. Nr. 18. 1914. S. 987. 44) 關, 結核. 第5卷. 第11號. 45) Severin, Zur Diag., Prog. und Therap. d. primäre Magen tbc. D. M. Wschr. 1926. S. 1168. 46) Spengler, Zur Kenntniss d. Magen tbc. Med. Kl. 1921. S. 101. 47) Simmonds, Über Tbc. d. Magens. M. M. Wschr. Nr. 10. 1900. S. 317. 48) Straus u. Würtz, Über den Einfluss d. Magensaftes auf die tbc. Bac. Baumgartens' Tahresberichte. 1888. S. 176. 49) Struppler, Zschr. f. Tbc. Bd. 1, 1900. S. 311. 50) 常久,癌. 24 卷. 第 1 號. 51) Wilms, Miliar tbc. d. Magens. Centrbl. f. Allg. Path. Bd. 8. 1897. S. 783. 52) Wolf u. Richard, Magen tbc. u. Magencarcinom.

Zschr. f. Krebsforsch. Bd. 30. 1930. S. 482. 53) 矢吹,滿洲醫學會雜誌. 第 11 卷. 第 2 號. 54) 山椎,病的材料觀察法. 第 3 及 ピ第 5. 55) Ziegler, Lehrbuch d. spez. Path. Bd. II. 1906. S. 595.

附圖說明

- 1. 結核性胃潰瘍
- 胃壁ニ於ケル乾酪結節
 E. 粘膜面. K. 乾酪竈.

- 3. 胃壁ニ於ケル結核結節.
 - S. 漿膜面. R. ラングハンス巨態細胞.

楠 本 論 文 附 圖



